兵庫県産甲虫類研究史概説(1)

高　橋　寿　郎

本研究史はかつて筆者が“兵庫生物”誌上に発表させて貰ったものであるが（Vol.6, No.5：350-351, 1974. Vol.7, No.1：37-38, 1975. Vol.7, No.2：75-76, 1976. Vol.7, No.3：128-130, 1977）発表以来年数も経ていて新しい資料も見つかったりまた前回以後の解説も必要となってきているので古い所は余り変更の要はないのであるが今一度始めからまとめ直してみたものである.

動物学，昆虫学が日本に独立したのは明治以降のことであるがそれ以前では昆虫の研究は博物学の中に包含されており，その博物学や本草学から分化し物産学や名物学というようになったのは江戸時代まず元禄からと云えよう.

日本では中国から儒仏に伴ってわが国に伝来した本草の学は薬に関する知識の培力となったが7世紀以降17世紀にいたる久しい才日の間は著しい発達を見ない暗黒時代であった.

ところが近世になって江戸時代の文教の興隆に伴い本草学は薬物学として発達したばかりでなく博物学も物産学や名物学に育ってゆくとともにその一環として昆虫学も萌芽を出したのである.

江戸末期に洋学の知識が入ってくるとともに日本を訪れる欧米人も多くなり日本の昆虫学の発展がこれ等欧米人によってなされるようになった．兵庫即ち神戸も兵庫の港として古く開けたので欧米人の来訪者の多くが兵庫に立寄り或いは滞在して昆虫の採集をしておりその関係で兵庫に関する昆虫の研究も日本の昆虫の研究とほぼ同じ位の時代から知られていることになる.

そもそも兵庫は古くから務古(ムコ)の水門(ミナト)或いは大輪田(オオワダ)の泊の名で知られ（約2～3000年前現在の會下山の南のふもとに栄えた部落がさらにその南の大輪田の泊～大和田の泊～を生み出した．これは播摂五泊の一つとして数えられた）.

1868年12月7日に兵庫開港の名のもとに神戸浦が開港されて世界の港としてスタートした．したがって神戸が中心となって調べられており他の地はほとんど調査の手が及ばなかった.

兵庫の名の由来は大化改新（645年）のとき，兵庫（兵器庫）を設けることを定めたことから起こっているといわれている．大化元年（645年）の考徳紀には「閑曠なるところにおいて兵庫（やぐら）を起造（つく）り，国郡の刀・甲・弦を収め聚（あつ）めよ…」とある.

この地に「兵庫」を置いた理由としては海外からの難波船が流れついた場合に対しての警備のためや，また畿内と西国街道との重要地点であったため置かれたものと思われる．そして「兵庫」の名が

地名化し，現在の兵庫になったといわれている．兵庫の地名が始めて文献に見られるのは「吾妻鏡」寿永３年（1184年）の条に「兵庫三ヵ庄」と荘園名を記していると（“由緒あるまち兵庫”兵庫区役所刊，1975，1988）．

また神戸という名は1879年４月に従来の神戸村と坂本村及び兵庫村が合併したことより始まり，それ以前は神戸町又はその前は神戸村で合併迄は兵庫港の方が有名であった．兵庫港～大輪田の泊は平清盛によって築港工事が営まれて今日の発展の基をつくった．それ故古い文献には神戸より兵庫が出ているがこの兵庫はやはり現在の神戸市の中の一部であり厳密には湊川より西が兵庫である（慶応３年12月６日兵庫開港の日，当時の兵庫とは湊川――いまの新開地本通り――から柳原の間の海岸地帯で人口約20,000人，戸数5,000余．神戸と呼ばれた地域，いまの中央区には走水，二つ茶屋，神戸の三村合わせて4,000人、1,100戸などが散在していた――故郷燃える，幕末編，のじぎく文庫，1970）

このように日本の昆虫学の基礎が欧米人の来訪によって出来たと同時に兵庫県における昆虫学の基礎もほぼ同じ時代から始まることになる．

そこで兵庫県産昆虫類（主として甲虫類について）の研究の概略を眺めて見ることにする．

江戸末期迄

西欧においては古代ギリシヤに既にアリストテレスのようなすぐれた動物学者が現れ動物を科学的に観察することに成功している．

西欧でも日本でも動物学は医学の発達に伴って興ってきたことは同じである．西欧では顕微鏡の発明により動物学は飛躍的に発達したのに日本では６世紀に中国より伝来した医学の中に本草なる一科があり18世紀になってその中から動物学が育った．本草は勿論中国に起こったものでその基礎を築いたのは江蘇省円陽府稜陵の人陶　弘景であるとのこと．彼によりその頃伝存していた“神農本草経”を基礎として“名医別録”とを合わせて“神農本草経，三巻”更にそれに注を加えて“本草集注”三巻（500年）を作ったが之が日本に来て本草学の母胎となったわけである．昆虫の害は自然の一員として古き人達にも多かれ少なかれ影響を与えたであろうから人間に直接関係のある虫は古い書籍の中にも当然出てくる．

“古事記”は８世紀始め和銅５年に出来上がった吾が国現存の最古の記録である．日本書紀は古事記より８年後，養老４年に完成したもので之等両者の中には昆虫としては僅かにアギズ（蜻蛉），ハヒ（蝿），シラミ（虱），カヒコ（蚕），ハチ（蜂），アム（虻）の如き非常に身近な虫のみが出てくる．

“風土記”は官撰の郷土誌でそれぞれの動植物を載せている．残念ながら完全に残っているものは

ほとんどない.

“播磨風土記”も完全に現存していない（巻首を欠損し，総記および明石郡の部がなく，巻尾にあるべき赤穂郡も欠くと），大体動物，鳥の記載は多く虫の名はほとんど出ていない（風土記，東洋文庫，1987）.

“萬葉集”はわが国最古の歌集であり，8世紀より以前4世紀余りの期間にわたって謡まれたものを含み4,500首にあまる長短の歌謡の中，動植物に関するものは可成り多いが昆虫類はやはり身近なもののみの様である．出ている虫はハチ，アリ，ハエ，カ，チョウ，ガ，カイコ，クワゴ，カゲロウ，セミ，ヒグラシ，ホタル，コオロギ，キリギリス，トンボである.

正倉院御物又は正倉院宝物として良く知られているものに“玉虫厨子”のあることは有名である．正倉院薬物の中にはミツバチの蜜蠟——蔺蜜，無食子——没食子——インクフシバチの虫瘤，紫鉱——ラックカイガラムシのラック等がある.

中国では4700年前既に養蚕法が知られており，蜜蜂の飼育法，飛蝗の発生，生活，防除法等も3000年位前から知られている．しかし日本でも之等は古くから知られている．養蚕のことが日本の歴史上に出て来たのは一番古くは雄畧天皇の6年（462年）“皇后自ら桑蚕の事を勤めたまふ．スガル（蜾蠃）に命じ国内のコ（蚕）を集めたまふに誤りてワカコ（嬰兒）を集め来たりたるによりチヒサコベ（少子部連）の姓を賜う”とある．その後継体天皇元年（507年）にも農桑を勤めたまうとあり養蚕はその後日本では大いに普及したと考えられる.

恒武天皇の延暦15年（996年）伊勢，三河，相模，近江，丹波，但馬6ヶ国の女2人宛を陸奥に遣はして2年間養蚕法を伝習せしめたという記録もある.

皇極天皇2年（643年）に蜜蜂の巣房四枚，百済太子余豊が三輪山に於いて放ち養いしも繁殖せずというのが養蜂の日本で始めての記録であろう.

蝗（イナムシ）の大害（之はイナゴだけでなく，メイチュウ，ウンカ等稲の害虫の總称）のことは文武天皇，大宝元年（701），清和天皇の貞観元年（859），同16年（874）等々に記録が出てくる.

江戸時代の始め明の李時珍の名著“本草網目”が伝来した，天下が漸く安定した時でもあり家康の奨学の政策と相まって本草学はここに学術として発足した.

この“本草網目”は日本の本草家や博物学にとって聖典として珍重されそれぞれが基となって貝原益軒著“校正本草網目”（1673），稲生若水著“新校正本草網目”（1714），寺島良安著“和漢三才図会”（1713），小野蘭山著“本草網目啓蒙”（1803）等の名著が出てきた.

八代将軍吉宗の時代，所謂る享保時代（1716～1745）以前の主なる本草学者は京都にいた．ただ貝原益軒のみは福岡に住んだ．その当時吉宗は国産開発を奨励して各地に採薬使が派遣され薬用植物を主とする調査が行われた．之に刺激された全国各地各藩にその地方の動植物や鉱物などを調査しよう

という機運が著しく勃興した．この“産物御尋”によってわが国各地の動物相や植物相が著しく明瞭の度を増したことはたしかである．

各地の産物の報告書，目録帳，主要産物の繪図帳などは追々幕府に提出された．現在残っているのは極めて少ないがその中に兵庫に関するものは次の如きものが記録として残っているががその内容は全くわからない．“播州網干産物之内繪図註書”（浅岡新兵衛）（元文２年、1737）．

その頃から本草学者が集まって動植物あるいは鉱物などの品類を陳列して学者相互の研究に資し，あるいは一般民衆にそれら天産物の知識と趣味とを普及するのを目的とした物産会が始まった．

物産会は専ら江戸で開かれた（神田，本郷，湯島等），第５回の会（宝暦12年）には一般の人の出品をつのり“摂津，播磨”からも出品があったと記録があり，それと相前後して大阪でも京都でも物産会は開催されている（文政甲申、1824，岩崎常世著“武江産物誌”は1967年上野益三博士によって覆刻されている）．

この時代の諸候には博物学を好み，自ら著述を行い，動植物を写しあるいは画家をして寫生させたのが少くなかった．熊本藩主，細川越中守重賢（銀台候）は各地の動植物の写生図をつくること夥しくその内の一つ“虫類生与”は明和２年東山道通過の時の写生が多く中に“播州のとんぼう”というのがある（本書は1969年細川家名宝展として宝塚ギャラリーで展示され見る機会を得た）．この物産会から本草学あるいはそれ以外の文学書，史書類の群籍に現れた動植物などの名称が何物を指すかを考証するのが名物学であり主として有用動植物や鉱物などをしらべ進んでその栽培養殖の方法や利用などを考究する，又ある特定の地方の動植物の種類や効用などを調べあげること等を物産学といった．

文化文政以後江戸の博物学は益々隆盛の域に達し動物のみを研究する学者が現れるようになった，それに対抗するように名古屋にも一派（尾張学派）が出て斯学の研鑽につとめた．それ等の内有名な書としては水谷豊文の“虫譜”（昆虫，直翅目75種，鞘翅目約60種，半翅目約30種），動物分類学の基礎として生物分類の基本を種なる概念におくとした伊藤圭介著“泰西本草名疏”３巻（文政12年），大河内存眞著“虫類写集”，吉田雀巣庵（平九郎）の“虫譜”特に“蜻蛉譜”栗本丹州著“虫譜”（所謂る栗氏虫譜，栗氏千虫譜，丹州虫譜，文化８年，1811年ともいわれている），飯室楽圃著“虫譜図説”12巻（安政３年丙辰，1856年）等々がある（南山公・島津重豪にも“薩州虫品”と云う著作があると．柏原精一，科科朝日，1989），さらに大阪に生まれた一博物研究家堀田龍之助と云う人が嘉永６年発丑（1853）５月11，12日大阪で岩永文禎の玄昌堂物産会が開催されそれに多数の蒐集品を出品したとしてその当時の品目からそれを写されているのを見るとコガネムシだけでも９種程出品されており中には“五分セミ　武庫川”と産地名も入っていたりする．多くの昆虫が出品されたことがわかる．ただこの昆虫がどのような体裁で出品されたのか知り得ないし，その標本も残っていないのは残念である．だがその当時町の研究家でそのような標本をこしらえ一般に展示すると云った様なこ

とをした人がいたと云うことは大変興味がある（上野益三，博物学者列伝，1991）．

そしてこの頃より外国人の日本訪問が始まると共に Linné の分類による影響も出て次第に動物学より別れて昆虫学として独立した学科としての道を始めることになる．

（追記）最近小西正泰博士著“昆虫採集の歴史”（虫の文化誌，朝日選書，1992）を拝見しているとその中で（p.37）“「石の長者」木内石亭は「雲根志・前編巻3，1773年」のなかで「摂津有馬愛護山で拾ったアリの化石三個を持ってきて見せてくれた人がある．それで翌年そこにいって4，5人で終日さがしたが見つからなかった」とのべている．これは昆虫の化石について日本で最初の記事であらう”と述べられている．甲虫ではないが昆虫化石に関心をもたれ有馬あたりで採集された記録がその頃既にあったことがわかり大変参考になった．

兵庫県のアリモドキ

（兵庫県甲虫相資料・266）

高橋寿郎

アリモドキ科（Anthicidae）は古くイッカクチュウ科と云われていた．この科に属するあるグループのものにつけられた名を科の呼び名に使用していてこれは不適当であると三輪勇四郎博士は名著“日本甲虫分類学”（1938）の中で言及されている．

野村　鎮氏はこの科のものの特徴からアリモドキ科が適当であるとこの科名を提唱された（自然の観察　11号，p. 2-4，1960）．その後現在にいたるまでこの呼び方が使用されている．

日本産のこの科のものは1989年の平嶋義宏博士監修の“日本産昆虫総目録・I”によると3亜科12属62種となっている．

日本で始めてこの類の研究発表があったのは1876年の Marseul の論文だろうと思われる（Ann. Soc. Ent. France 6(5)：447-486）．この論文は G. Lewis の採集品に基づいたもので19の新種並びに4種の記録種（No.92～109）が発表されている．

その後 G. Lewis 自身が日本産アリモドキ科の報告をまとめられている（Ann. Mag. Nat. Hist., 10(6)：422-450，1895）．その中では1新属，16新種，11種の記録が記載されているがp.445-446